

高橋一清「百冊百話 高橋一清の本の世界」62

井上寛司、岡崎三郎編集・執筆「益田家文書の語る中世の益田」

(益田市教育委員会発行)

利休が天下一と認めた「益田の壺」も

益田家には、中世から近代に至る700年間の1万点に及ぶ文書がある。名実ともに日本屈指の史料である。これらは東京大学史料編纂所^{へんさん}で調査されているが、東京へ運ばれる前に、江戸時代に125軸の卷子に装幀^{そうてい}された1267点は写真に収められた。

益田市立図書館で、その写真版104冊と「解説記録綴」14冊を目にしたのは、平成5(1993)年秋のことであった。解説し、原稿用紙に筆記したのは、広田八穂さんと岡崎三郎さんである。判読できなかった字句は、写真版からのコピーが切り貼りされている。私は二人の誠実さにうたれながら、帰省のたび読み耽った。

益田氏に対する毛利元就の策略には、底知れぬ怖さがある。陶晴賢を厳島の合戦で破り、毛利氏が石見へと進出したとき、益田藤兼は和談を申し入れる。喜び受けとめようとする息子の吉川元春を、元就は止める。大内氏攻略のため、毛利氏は益田氏と争いの絶えない津和野の吉見氏と結んでいる。益田氏と和睦したと知ったらどうなるか。よって、和睦しているようで、そうとは言えない態度をとり続ける。益田氏は、毛利氏への恭順を示すため富田城の尼子攻めにも加わる。

益田藤兼と次郎親子が、吉田郡山城へ出頭するのは、申し出から10年後のことであった。元就の調略で兵を削がれ、戦費をついやした益田氏だが、それでもなお、貢ぎ物は豪華である。銭、太刀、馬、反物の他、虎の皮もある。益田氏主催の祝宴には、昆布、数の子が膳に出ている。このことから益田氏の船が北朝鮮から沿海州、また蝦夷^{えぞ}に通い、交易していたことがわかる。この吉田行きで、次郎は元服し、元就から一字をもらい益田元祥を名乗る。

今日では、先記の岡崎三郎さんと井上寛司さんによる『益田家文書の語る中世の益田』3巻があり、活字に復刻され、主要文書には訓読が示され、解説がなされている。

元祥は後に牛庵と号し「牛庵一代御奉公之覚書」を著している。この中に益田兼堯が將軍足利義政から拝領した茶壺のことが書かれている。千利休が天下一と認め、「益田の壺」と名付けた名品である。この茶壺は毛利輝元に渡り、石田三成が取り上げた。関ヶ原の戦いで三成敗退の後、その佐和山城とともに灰燼^{かいじん}に帰した、とある。『益田家文書の語る中世の益田』には、この話を裏付ける、毛利輝元が、「益田の壺」と千利休の書状をしばらく手もとに置いて愛玩したいと益田元祥に願う書状も紹介されている。「吉田出頭礼儀次第」に記載された品々といい、数奇な運命の茶壺といい、益田家文書は中世の益田の栄華と実力を伝える。

(『毎日新聞』平成25年4月25日付け、島根面)

※解説作業の進む東京大学史料編纂所により刊行されている『大日本古文書 家わけ第二十二 益田家文書之四』八六〇号の「進上道具覚書」にもこの「益田の壺」に関する記述がある。